

伊能図探究

現存する伊能図を尋ねて

NO 1

平成7年1月1日
伊能日本図探究会

発刊のご挨拶

伊能日本図探究会代表

渡辺一郎



新年おめでとうございます。1995年1月1日を期して、伊能日本図探究会を発足することとしました。約200年前に、高齢化社会顔負けの、熟年パワーを発揮して、日本で初めての科学的な日本全図を作成した伊能忠敬の偉業を偲び、その業績である伊能日本図を探究し、各所に散在する伊能図の存在を明らかにするとともに、作成された地図を通して伊能の全国測量の意義を探りたいと考えます。

伊能の手書き日本地図が、英国や、フランスに大事に保管されていることを、最近確認しました。日本国内でも伊能図の所在はすべて明らかなわけではありません。知られずに眠っている伊能図（良質の複製を含む）はかなりあると思われます。これらを、是非世に出したいと考えます。ささやかな、小誌が伊能図発掘の呼び水になれば望外の喜びです。

所蔵機関等でも、伊能図であることは分かるが、描図レベル、地図の種類、その製作時期、他に同種の地図の有無等は明らかでない場合が多いと思われます。本誌の論議を通じて、各地の伊能図の位置づけを明らかにし、それらの積み重ねで、全国的な伊能図台帳ができれば大変意義あることではないかと考えます。

また、戦前に伊能忠敬は国威発揚につかわれ過ぎたので、その実像には伝説と真実が入り混じって、正確な認識が欠けていると思われますが、それらについても論議を重ねていきたいと考えます。色々な方のご意見・投稿をお待ちします。

伊能測量隊メモ

1. 測量期間 第1次測量出発1800年6月11日 第10次測量帰着1816年9月29日
測量日数 3736日
2. 測量距離 38,787Km（含む再測量） 測量隊の陸路旅行距離43,707Km
うち、忠敬自身の旅行距離35,108Km
3. 主測線距離 沿海 14,894Km
島嶼湖沼周辺 6,858Km
街道 11,971Km
合計 33,723Km
4. 忠敬の年齢 56才から72才までの17年間
5. 測量隊規模 6名（第1次蝦夷地）から20名（第9次九州2回目） 延べ約55,000人
沿道の町村、諸藩の作業支援稼働を含まない。

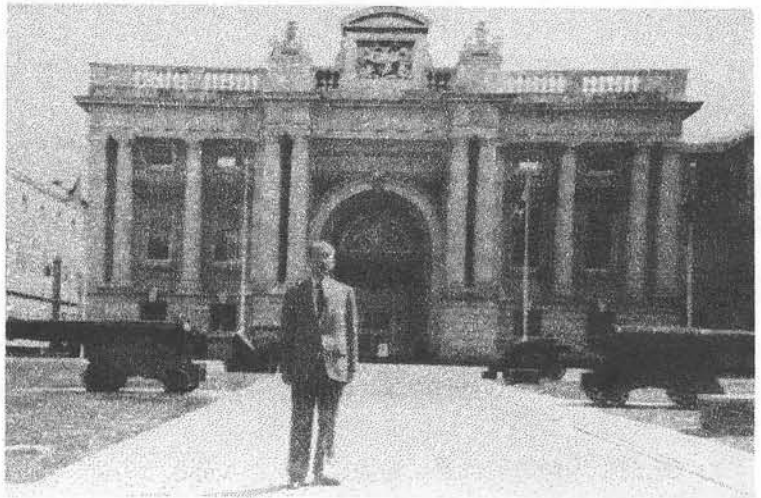
イギリス海軍が、幕末に日本近海を測量した際、作業を円滑にするために乗組んだ幕府役人を通じて、伊能図を入手し、その正確なのに驚き、測量しないで引き揚げたという話は有名である。当時の記録を見ると、この話は事実と云える面もあるが、そうでない面もある。伊能図を活用して、少ない時間で日本地形の全貌を把握できたのは事実で、彼等は利用できる部分は大いに利用したが、伊能図にない部分、例えば水深・暗礁などは入念に測量し、商船の航行に必要な情報は時間の許す限り測量したというのが事実である。

その伊能図がイギリスに現存することは、文献で紹介されているが、ほんとうに存在するのか、現物はどのような状況にあるのかわからなかった。筆者は、イギリスの伊能図が、伊能小図の写しであること、現在の所蔵者がロンドンのグリニッチにある国立海事博物館であることを知り、1992年に海外出張の途中で訪問して、伊能図の研究者であることをの述べ閲覧を申し出た。

こじんまりとした清潔なreading roomに通され、司書の女性は伊能図のことをすぐ理解して担当に連絡して呉れたが、残念ながら、1週間前に予約しないと見せられないとのことであった。写真は撮って貰うことが出来るとの話なので、担当者名を聞いて引き揚げた。

帰国後、何回かの手紙のやりとりののち、モノクロ写真はあがカラー写真は無いことがわかったのでカラー撮影をお願いし、4*5時のボジと8*10時のプリントを入手した。この写真により文政4年最終版伊能小図の3枚揃いがほぼ完全な状態で保存されていることが確認された。

日本では最終版伊能小図は、神戸市立博物館の南波コレクションに、北海道と西日本の2枚があるが、本州中央部を欠いている。その他には個人蔵の蝦夷地の部が知られているが、3枚揃いの最終版伊能小図の存在は確認されていない。グリニッチの伊能小図（以下グリニッチ小図という）は貴重な存在である。



イギリスの伊能図の存在は確認されたが、前記ボジでは文字等が読めないの、1994年春、細部にわたり図の内容等を検討できるよう、文字が読める解像度の8*10時のボジの撮影を依頼した。技術的にかなり苦勞されたようであるが、到着したボジは大変精度のよいもので、大倍率の引伸ばしにも耐えるものなので、日本地図資料協会の月刊古地図研究300号記念論文集の別巻として複製を計画している。また、関係のリポートは同論文集本誌に掲載の予定である。伊能図研究あるいは伊能忠敬理解の一助となることを期待している。

(写真は英国の国立海事博物館全景)

探究の対象とする伊能図について

幕命により、伊能忠敬が全国を実地に歩いて測量し製作した「日本地図」は伊能図といわれている。周知のように大図、中図、小図の3種を基本とし、他に特別地域図等特殊な図がある。各図は複数の図葉から成っており、10回にわたる測量に応じ調製して幕府に上呈されたので、その種類は膨大なものである。最終的な幕府への提出図は、忠敬の没後4年の、文政4年（1821）に、大日本沿海輿地全図として上呈された。

文政4年の図は、大図214葉（30巻）、中図8葉（2巻）、小図（1巻）からなっていたが、幕府から明治政府に引き継がれ、明治6年5月の皇居炎上の際、灰になってしまったという。その後、伊能家にあった副本が政府に献納され、東大の付属図書館に保管されていたが、これも大正12年の関東大震災で図書館とともに焼かれ、正式な伊能図はすべて失われてしまった。

しかしながら、伊能家には数次の上呈の際の控えの図が若干残っており、現在では、佐原市の伊能記念館に、伊能忠敬関係の遺書ならびに遺品85点の1部として、国の重要文化財に指定されている。また、測量途中で諸侯その他の求めに応じ複製して提供したり、幕府の要路に献上した図が、僅かではあるが各所に散在している。これらの断片的なものを見るだけでも、美しくかつ正確で上呈図が如何にすばらしいものであったかを想像するに充分である。

現在に伝えられている伊能図の所在と概況については、関東大震災前の状況は大谷亮吉著「伊能忠敬」に述べられており、第2次大戦後の状況は秋岡武次郎氏の著書論文に詳しい。また、保柳睦美氏はこれら論文に触れていない伊能図について補足し、科学的な見地から伊能図の地図としての評価について種々論文を発表している。最近では、神戸市立博物館の赤木康司氏が各地の伊能図の実見調査をされ、考察を発表されている。

本誌は各地に散在する伊能図について、図版中心による探究を意図したものである。伊能図の種類は非常に多いので、これまで余り知られていない図や代表的な図に重点をおくこととした。

本論にはいるまえに、本稿で取り扱う伊能図について範囲を規定したい。狭義に解釈すれば、伊能図は上呈された正本と伊能家に残された副本のみであるが、それでは余りに範囲が狭いので、つぎのようなものとした。

- 1) 上呈された正本、副本、および当時の各方面の要望に応じて伊能グループの手により製作されたと認められる手書き地図。複製には測量下図の測線の屈折点を針で突いて写したので、突手本ともいう。
- 2) 伊能グループによる下図、原稿図、試作図、中間製品、等
- 3) 江戸期において、原図に忠実に作成された模写図。
- 4) 明治以降において、伊能図の原型の保存を目的に手書きにより、忠実に複製された模写図。但し展示用の模写を除く。

したがって、幕末に開成所から編集発行された官板実測日本地図とか、シーボルト製作の日本図、明治から大正にかけて、暫定的に作成された参謀局等の国土基本地図、幕末から明治にかけて作成された、複製を複製した手書き写図等は伊能図の範囲としない。

伊能図の種類と概要

10回にわたり行われた伊能測量隊の測量行と、その際、作成・上呈された伊能図の種類と概要をまとめると以下のとおりである。

(1) 蝦夷地東南岸および奥州街道測量 180日間(寛政12年4月より10月)

蝦夷地東南海岸および奥州街道の測量をおこなった。約60地点で天測して緯度を測定し緯度1分の距離を求めた。大図と小図を作成し、幕府勘定所および若年寄堀田摂津守に提出した。(中図は作成しなかった)

大図は蝦夷地10枚、奥州街道11枚、経緯線はなく、最終上呈図と比較するとかなり簡単な図である。蝦夷地東南岸は実測経路(以下測線という)を朱線で示すほか、沿道の山並みを緑色で描き、遠望される高山、岬、海岸線、集落、地名などを記入する。

小図は蝦夷地および奥州街道全域を1枚に描く。経緯線があり、経線は浅草の暦局を0度とする。蝦夷地沿海は山・岬などを表現するが、奥州街道は殆ど1本の線である。

伊能図の縮尺は一般には、

大図1: 36,000(曲尺3寸6分:1里)

中図1: 216,000(曲尺6分:1里)

小図1: 432,000(曲尺3分:1里)

であるが、寛政12年測量の大図は1:43,636、小図は1:436,363である。中図は作成されなかった。

寛政12年測量の伊能図は、伊能記念館(小図)、東京国立博物館(大図・小図)ならびに国立歴史民族博物館(大図・小図)に蔵する。

(2) 伊豆相模・関東以北東海岸および奥州街道測量 230日間(享和元年4月より12月)

伊豆相模からはじめて、本州東海岸および奥州街道を測量した。大図32枚、中図2枚、小図1枚を作成、大図・小図は享和2年に幕府に上呈し、中図は堀田摂津守に提出した。

大図は縮尺1:36,000、国郡界、道路、山川、宿場を記入する。経緯線や伊能図の特徴である著名目標に対する方位線はない。

中図は蝦夷地東南岸を含む。経緯度、方位線を記入する。縮尺1:216,000。江戸深川を経度0度とする。小図は中図の内容を1枚に表現し縮尺1:432,000。余白に凡例、諸地点の緯度、江戸よりの方位距離を示す。この測量で緯度1分の長さを28.2里とした。中図は、伊能記念館ならびに早稲田大学図書館に蔵する。

(3) 出羽・越後沿海測量 132日間(享和2年6月より10月)

青森より越後今町までの海岸および出羽、越後街道を測量した。原稿を幕府に提出したといわれる。現存する地図はない。

(4) 東海道・北陸沿海測量 219日間(享和3年2月より10月)

東海道、北陸沿岸部等本州中部を測量した。この期間に測量した地域のための図は作成されていない。

(5) 享和3年までの測量結果を総合した本邦東半部沿海地図

文化元年8月に上呈された尾張越前以东の日本東半分の総合図で、〈沿海地図〉と略称される。大変見事な描図で、9月6日に江戸城大広間において將軍家斉の閲覧をうけた。こののち、伊能忠敬は御家人の身分を与えられ、天文方の手付きとして、門弟のほかに下役を配属され、正式な幕府の測量隊として、天文方の旗を立て測量に従事した。大図69枚、中図3枚、小図1枚からなり、全体的な描図形式は文政4年の最終上呈図とほぼ同じである。

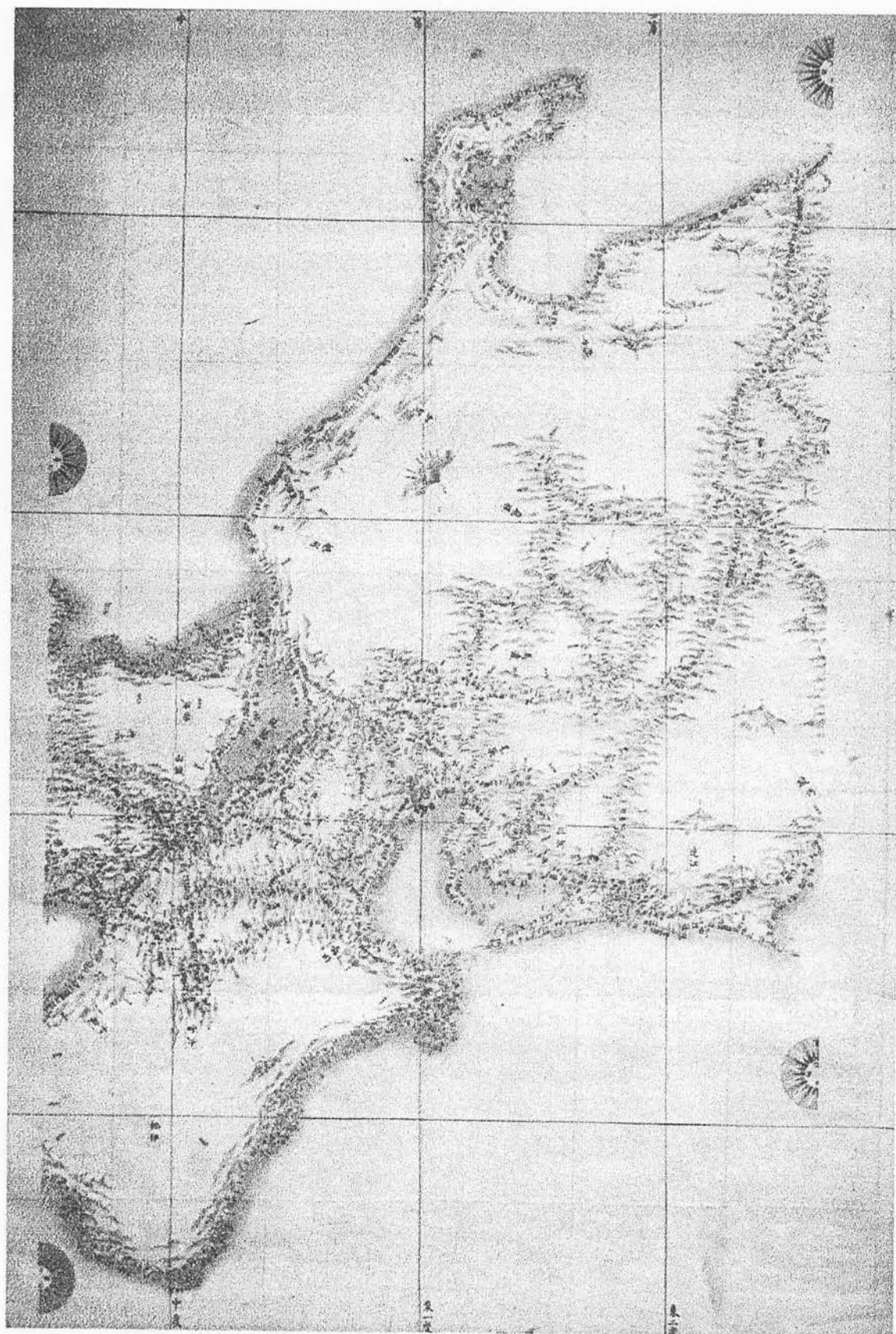


图 1-1 成田山仙教图书馆藏 文政 4 年伊能中国 (中部)

大図は、国郡の境界、村落、都邑、寺社の位置名称を記号で示し、幕府領、私領、寺社領の別、および領主名を記入し、山岳、河川、岬、湾の位置形態を彩色で表示。経緯線、方位線の記入はない。

中図は、国郡、都市、港湾、村落の名称を記入するが、領主名は省略している。地勢は概略を記すが経緯線を描き、著名目標への方位線を朱線でいれ、方位角を記入する。経度の中線は江戸深川の黒江町。余白に約300地点の緯度里程一覧表を載せる。小図の描図形式は中図とほぼ同じである。緯度里程表はないが、小図には忠敬の凡例、上司の高橋景保、吉田秀賢の序文がある。凡例では伊能図の種類・縮尺・測量方法・地図作成法・読図の要点などが説明されている。小図は簡便なため多くの副本や写図が制作された。主な所蔵者はつぎのとおりである。

大図：伊能記念館（69枚揃い）

中図：伊能記念館（2組）、文部省史料館、徳島大学付属図書館

小図：国立国会図書館（2組）、文部省史料館、神戸市立博物館、小倉陽一氏、
内閣文庫、宮内庁書陵部、太鼓谷稻荷神社、津田信次郎氏、古河歴史資料館

（6）紀伊半島・中国地方沿海測量 640日間（文化2年2月より文化3年11月）

東海道から紀伊半島、中国地方の沿海をまわり若狭から東海道経由で帰着した。大図小図の存在は知られていない。中図2枚が作成された。そのほか、測量地域の沿道の風景を大縮尺で描いた特別地域図が作成され、幕府に提出するとともに要路、知友に頒けたという。

琵琶湖図、厳島図（1：36000）、天橋立図（1：12000）などがある。特に琵琶湖図がよい。中図は伊能記念館、徳島大学付属図書館に、特別地域図は伊能記念館に蔵する。

（7）四国・淡路島沿海・大和地方測量 377日間（文化5年1月より文化6年1月）

四国・淡路島沿海ならびに大和地方を測量した。大図は四国・淡路島17枚、大和伊勢街道4枚、および気賀街道1枚を作成した。中図は四国・淡路島を1枚に描く。小図は不明である。ほかに沿道風景図11巻がつくられた。中図は徳島大学付属図書館、国会図書館に、気賀街道大和街道・沿道風景図等は伊能記念館に蔵する。

（8）文化5年までの測量結果と他の資料による暫定日本全図

幕府より日本全国を1枚に示す地図の要請があり、高橋景保が暫定的に編集し作成した。厳密には伊能図といえないが、上司の景保が忠敬のデータを利用して編集したので伊能図に加える。縮尺は小図の2分の1である。このとき作成された図を日本輿地図藁という。未測量の九州の地形が細長くなっている。本図は神戸市立博物館に蔵する。

（9）九州第1次測量 631日間（文化6年8月より文化8年5月）

九州東部および南部の沿海および途中の諸街道を約2年かけて測量した。作成された地図は、大図が21枚、中図1枚、小図1枚という。徳島大学付属図書館に中図1枚、大図3枚を、また京都大学付属図書館に大図のうち、島嶼の7枚および中図を蔵する。

（10）九州第2次測量 913日間（文化8年11月より文化11年5月）

九州北部および島嶼部等残部と途中の諸街道を2年半以上かけて測量した。はじめの頃と比較して、測線も著しく密度が高いが、その目的はよく分からない。草稿を閲覧に供したと考えられる。作成が明らかなもの大図数枚。中図、小図は不明である。

（11）伊豆東海岸、伊豆七島の測量 340日間（文化12年4月より文化13年4月）

忠敬は参加しなかったが、下役・門弟により実施された。伊豆七島について特別大図（1：12000）7枚が作成された。大図は明らかなもの1枚。中図は、伊豆半島より七島全域を描くもの1枚が知られる。小図は不明である。特別大図は伊能記念館に、中図は神奈川県立金沢文庫に蔵する。

(12) 江戸府内測量 74日間(文化13年8月より10月)

最後に全国測量の起点としての、江戸府内の測量が行われ、縮尺1:6000の大図2枚が作成された。中図、小図は作られていない。これまでの測量は、例えば高輪の大木戸のような街道の出発点から始められていたので、江戸府内を測量し連結した。

気象庁、国立歴史民族博物館、国土地理院、神戸市立博物館に部分的に蔵されてる。

(13) 文政4年最終上呈図

全国測量完了後、忠敬は文政元年(1818)4月14日、74才で病没した。その後は、高橋景保の指導の下で関係者により文政4年までかかって最終的な日本実測全図が完成した。7月10日に景保は忠敬の孫伊能忠誨をともなって登城し正式に上呈した。忠敬の喪は9月に発表された。文政4年の最終上呈図について、大谷亮吉氏は地図のまとめに協力した久保木清淵の手記を引用してつぎのごとく記している。

大 図 214枚 地紙ドウサトウ紙 裏美濃紙三返打。図幅は広さ三尺七寸九分。南北の長さは地勢に随い少し長短がある。毎紙は合符を以て接続すれば、地脈が連続する。

二百十四枚を約三十巻六函とする。およそ一巻七枚。一函五巻。軸小口は浅黄滑綾裏。帙表 色薄絹裏藤紙。緒絹糸平打青白。函は桐造。

中 図 8枚2巻 小 図 3枚1巻 合わせて1函とする。

五尺二寸九分。地紙装飾大図に同じ。

表題については、

函標題 実測輿地図 大図は紙裏の辺に自某到某 第1第2 等とする。

標 題 大日本沿海輿地全図第1第2 等とする。

中小図もこれと同じである。

同時に提出された輿地実測録については、

輿地実測録14巻 内1巻序・目次・凡例 717枚 美濃紙黒界本。

標紙 紅蒲色サヤカタ打出白練糸。小口以浅黄の箱入り。とある。

上呈された地図は、明治6年の皇居炎上で焼けてしまい、見ることはできない。大図は断片的な副本が各地に残るのみである。中図の八枚完全揃いとしては、東京国立博物館、成田山仏教図書館、その他に副本が残っている。日本学士院にある明治期の模写になる中図は、伊能家にあった文政4年中図副本(東大の図書館に保管中に関東大震災で焼失)から模写したものである。小図は神戸市立博物館に本州中部を欠く2枚組が蔵されている。小図3枚揃いは、幕末に英国測量艦に渡され、ロンドンの国立海事博物館に所蔵されるものが知られている。その他、海上保安庁水路部に明治初年水路図作成の参考のために縮小模写された大図を蔵している。

(14) 伊能特別小図

文化6年に暫定的に作成された、縮尺1:864,000の日本全図(日本輿地図藁)を正しいデータにより修正して提出された。伊能特別小図といわれる。全1枚。上呈された特別小図と同じ副本は現存しない。小型で便利のため、複製されて多くの異本が残っている。内閣文庫、宮内庁書陵部、等に沿海地図とセットで所蔵される。

(15) 日本地理測量の図

特別小図の完成された形式の図という。縮尺小図の2分の1、方位線なく、山岳名や地名、国界を記入。目標の方位、主要地点までの距離、島嶼、等の一覧表を欄外に記載する大型の日本全図である。文政4から文政7年までの間の作成と推定されている。神戸市立博物館等に蔵する。

(16) シーボルト図

文政9年、上記特別小図を高橋景保が大至急写して、海外の資料と交換にシーボルトに渡そうとしてシーボルト事件を引き起こした図。全3枚。地名をカナ書きにする。記入事項は多少省略がある。国立国会図書館古典籍室に蔵する。また、国会図とほぼ同様なカナ書きで、蝦夷地を除き本州・四国・九州を合わせ1枚とした特別小図を、静嘉堂文庫（大槻如電旧蔵）に蔵する。

(17) 測量下図、測量下絵図

伊能図の作成にあたっては、沿海・街道等の測量経路に従い、測量結果による方位と縮尺に従った測線を、和紙上に墨線で描いた測量下図を先ず作られた。その後、地図を描こうとする紙の上に測量下図を重ね、屈折点を針で突いて測線を写し取り、周辺の山岳・風景・地名等を記入し彩色した。測量作業中に作成された測量下図は膨大な量であったと思われる。伊能記念館に1部が残っているが、東京大学附属図書館、三康図書館にも所蔵されている。

前述の要領で写し取られた測線の周辺に風景による肉付けをし、また、著名な山岳等の測定位置に遠景を書き込む資料として、担当者に沿道風景を墨絵で写生させた。伊能記念館にその1部が保存されている。測量の際の下絵図である。早稲田大学図書館にある野取り図帳もその1種である。

成田山仏教図書館蔵 文政4年伊能中図

成田山仏教図書館は、東京国立博物館の伊能中図と同じ、文政4年上呈の最終版伊能中図の8枚完全揃いを所蔵する。別添の伊能図はそのうち、第5（中部畿内）の部の全体図および奈良付近の部分拡大図である。

整理名は伊能忠敬実測中図。紙本彩色。軸装はなく、8枚をまとめて巻いて木箱に納める。虫食いは殆どなく、保存良好、彩色は東京国立博の図より淡彩である。針穴がわかる。子午線は京都を0度とする。経緯線、方位線、接合用標識等、最終版中図の形式を完全に備えている。8枚の構成はつぎのとおりで、寸法も東京国立博図とほぼ同様である。

第1	蝦夷	170×160Cm
第2	北海道	243×158Cm
第3	奥羽	213×161Cm
第4	関東	273×159Cm
第5	中部	229×160Cm
第6	四国中国	219×158Cm
第7	九州北部	172×159Cm
第8	九州南部	160×159Cm

地図本体には、図名、凡例、作成者など無く、蔵書印もない。木箱の蓋裏に

「紀元2600年11月 照定代 成田図書館」

とあるだけで、伝来を推定するものは何もない。第2代館長の荒木氏が紀元2600年記念として、第2次大戦前の昭和15年11月に、古書店経由で購入されたものである。

文政4年版伊能中図の所蔵者としては、東京国立博物館、成田山仏教図書館の他に、東京大学総合資料館、国土地理院、天理図書館、日本学士院、国立歴史民族博物館、北海道大学附属図書館が知られており、最近、仏のパリ郊外に住むイブ・ペイレ氏も所蔵していることがわかった。

これら各地の中図を概括的に比較すると、東大の図は関東を除く7枚であり、国土地理院のものは明治期の写図に戦後東博図をもとに補写したもの、天理の図は壱岐対馬および佐渡を別葉とする10枚で江戸後期の写しであり完成度が低く汚れがある、日本学士院の図は明治から大正期の写図、歴博図は中国四国の1枚のみ、北大は北海道の部のみである。ペイレ氏の図は8枚揃いと云われるが、実見した研究者はいない。

国内にある伊能中図としては、東博中図と成田中図が双璧をなすことは間違いないと考えられる。そうであるならば、いずれがより上呈図に近く、完成度、丁寧度が高いかに関心が持たれる。東博の中図は、代表的な伊能図として近年複製された。この複製図と、成田山仏教図書館の伊能中図を部分的な写真の対比により、書き込まれた項目について完成度の比較を試みた。

詳細は、次号に発表するが、結論的には成田中図のほうが完成度が高いと考えている。東博中図、成田中図とも写しであり、相互に脱落項目が見つかるが、その数は東博中図のほうが多い。また、字体は成田中図のほうが達筆である。年代も成田中図の方が古いと思われる。

お知らせ

伊能忠敬と伊能図の遍歴をはじめて20年近くになった。忠敬の研究は、大谷亮吉氏の「伊能忠敬大正6年刊」と保柳睦美氏の「伊能忠敬の科学的業績 昭和49刊」の大著に詳しい。その他でも、数百冊が刊行されていよう。

ただ、忠敬の作品である地図については、図版を網羅集録したものはない。大変なことではあるが伊能図全集的なものが出来ないかと検討したが、現在の印刷技術では相当な部数がないと負担できないことがわかった。DTPを利用することにより、小部数のカラー版の作成が可能と思われるので、このような方法による逐次刊行を考えてみた。

この道に造詣の深い、日本地図資料協会会長の師橋辰夫氏、および南波コレクションを収蔵する神戸市立博物館学芸員の三好氏にお諮りしたところ、両氏から御賛成を頂いたので、顧問としてご指導をお願いし、本会を発足することとした。すでに、全面的にご協力戴いている谷村、小山、越川の各氏とともに相談しながらやってゆきたいと考えています。

伊能図に御関心のある方のご声援を期待します。会友となって伊能図探究に参加して頂ける方は是非ご連絡下さい。伊能図の所蔵機関にはすべて配布する予定です。伊能図に関する情報、ご意見等をお寄せ頂けると大変有り難いと思います。また、個人的に継続して配布ご希望の方は、住所、氏名、職業、電話番号を書いてお申込み下さい。当面は、隔月刊を考えています。(渡辺)

編集後記

ご発表は、紹介、レポート、論説、何でも歓迎です。応募原稿は返却出来かねます。控えをおとり下さい。編集の都合上、文意を変えずに手を入れるかも知れません。お許し下さい。伊能図をお持ちの方は拝見させて下さい。フロピイ原稿は大歓迎です。MS-DOSのテキスト形式で、2DDの720KBのFDDで、プリントを添付してお願いします。なお、本誌の添付図は、プリントをシャープ製のスキャナで入力し、ホトショップでアレンジした全体図と、35mmのボジをphotoCDに書き込みアレンジしたものです。地図を扱うには、コンピュータ資源はまだ高すぎますが、やがて安くなるでしょう。

本誌のデータはすべて光ディスク(MOディスク)に保管しています。添付図のバックナンバー等容易に出力できるよう考えています。地図の研究用の媒体としては、MOは最適と考えていますが、いかがでしょうか。

伊能図探究 NO. 1

発行 平成7年1月1日

編集発行 伊能日本図探究会 代表 渡辺 一郎

撮影協力 小山 弥雄

所在地 東京都文京区本郷1-27-8-A1007

TEL&FAX 03-3818-0792

(昼間 TEL 03-5261-1801 FAX 03-5261-1803)